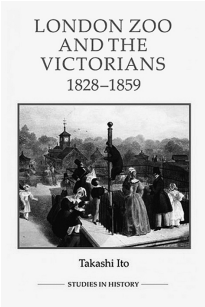
# 書　評




## Takashi Ito, *London Zoo and the Victorians 1828-1859*
(Martlesham: The Boydell Press, 2014)

岩間　俊彦

本書は、伊東剛史氏（以下、著者）が、ロンドン大学に提出した博士論文を基礎としている。すでに、ロンドン大学歴史研究所のHPの歴史書に関する書評（*Reviews in History*）や、英語圏の『歴史』『ヴィクトリア朝文化誌』『文化社会史』『イギリス研究誌』等々の学術雑誌に、本書の書評が掲載されたことが示すように、[1] 本書は、英語圏の学界から高い関心を得てきた。本評では、上記の状況をふまえて、書籍の特徴や内容を紹介したうえで、若干の所見を述べたい。

まず、本書は、美しいカラー装丁のもと、29点の図版（一部はカラーである）と6つの表が掲載されており、前者が魅力的かつ本文の記述と結びついて効果的な存在であることについて、特記しておきたい。目次は以下のとおりである。

Introduction: the zoo in history
1 The site of animal spectacle
2 Collecting and displaying
3 The question of access
4 Between science and commerce
5 Illusionary empire
Conclusion: the Darwinian moment
Appendix
Bibliography

序論において、著者は、現在の動物の権利や福利から19世紀のロンドン動物園を考察する方法や、動物園と帝国を所与の関係として把握し研究する視点について再考する。そして、19世紀のロンドン動物園について、博物館や美術館といった新たな公的領域における文化や娯楽に関する政治、商業化された社会における公的な（あるいは公開の）科学と関連する専門化や拡大、成長する都市社会における動物の意味を問うような動物史といった視点から、研究を進めることを提起する。続く1章から5章まで、目次からは想像しにくいが、ほぼ編年の構成のもと、約30年間のロンドン動物園の設置・展開・背景について、上記の注目点に基づきながら記述が展開する。

1章では、ロンドン動物園の建立をめぐる論争や建設の過程について、ロンドン動物学協会の設立（1826年）から約10年間の時期について検討する。シンガポールの植民地建設に尽力したトマス・スタンフォード・ラッフルズを中心に、ロンドン動物学協会によって1828年にリージェンツ・パークで開園したロンドン動物園は、政府側や近隣者の反対や動物園への懐疑的な意見にもかかわらず、人間と動物の相互関係をあらわすような協調的なイメージを創出しつつ、科学的知見に基づく動物園の展示方針によって、運営されていた。また、同章は、同時代の絵画、日記等々の分析を通じて、ロンドン動物園における賑わいだけでなく、人間、動物、建物の調和的な空間の形成を描き、ロンドンのアメニティとしてロンドン動物園を位置づけた。

2章では、1830年代半ばにおける動物園の運営や動物の収集・展示について、アフリカからキリンを送り展示する過程について焦点をあてながら、考察する。同時代の様々な史料を相互に参照しながら、本章では、ロンドン動物園におけるキリンの展示とその表象の形成は、帝国という要因だけでなく、英国内や帝国内の関係網の形成、英国内の文化の形成、個々の創造や欲求といった要因が絡み合って成立していたことを明らかにした。

3章では、1828年から1847年のロンドン動物園に関する入場や公的な機関としての位置について、考察する。すなわち、開園当時の原則として、ロンドン動物学協会会員とそれらの家族や友人が入場できたロンドン動物園が、同時代の公的な文化として、いかに貢献し運用されたのか、といっ

た点について、本章は検討する。例えば、同時代の日記や出版物や定期刊行物を参照して、上層社会の人びとが、ロンドン動物園や他の公的機関や催しといかに関わり活用したのかといったこと、日曜開園や入場料・入場者の規定に関する文化的論争、そして、ロンドン動物園が英国博物館と共に公的文化機関として政治的領域で検討されるようになったこと等について、興味深い叙述が提供される。

4章では、ロンドン動物園をめぐる科学と商売のせめぎあいについて、1847年にロンドン動物園が一般に公開される過程に焦点をあてて、検討する。著者によれば、一般公開を前後に挟んだ約20年間のロンドン動物園史は、注目・人気や収入が下方の螺旋の流れにあった1837年から1847年の時期と、再構成と復興の1847年から1859年の時期に分けることができる。そして、一次史料分析に基づいて、ロンドン動物学協会に関する職員数や給与、動物の数や展示数、付録にある動物学協会の収入と支出、ロンドン動物園や英国博物館等の来場者数を示しながら、都市での楽しみ方が多様化し、公衆に合理的娯楽を提供する商業部門が成長する中で、ロンドン動物園は、目を引く見世物を展開する空間としてだけでなく公衆が物語る装置として、ヴォランタリな科学の理想をあらわす面と商業や娯楽を提供する面の間で揺れ動く存在であったことが、描かれる。

5章では、ロンドン動物園を通じて、幻想としての帝国があらわれる過程について、1856年におけるヒマラヤの狩猟鳥の収集と順化（acclimatisation）の計画に関する事例研究から、考察している。科学の知見に基づいてロンドン動物学協会は、順化の試みとしてヒマラヤの狩猟鳥の収集を試みたが、現地の東インド会社との連携は十分に機能しなかった。この過程を検討しながら、著者は、帝国の建設と科学的営みが、常に相互補完的な活動としての順化を遂行する「帝国的な動物園」像について、再考する必要性がある、と主張している。

結論では、序論で示した文化に関する政治、公的な科学、動物史という視点から、明らかとなったことを整理する。文化的な領域では、ロンドン動物園の来場者が想像上のまとまりを有するとともに、彼ら彼女たちの活動が多様であったことを明らかにしたり、科学に関する専門家の世界と非専門家の世界といった二分法ではなく、公的な空間における科学の消費

や活動としてロンドン動物園を描いたり、ロンドン動物園における人間と動物の相互関係だけでなく動物園の展示が、帝国という概念のみでは理解できないことを明らかにしたりすることによって、本書の意義を示している。

本書の貢献は、第一に、一次史料に基づくロンドン動物園の事例研究の魅力を示したことである。既存の研究成果をふまえ、著者独自の問題意識から、ロンドン動物園の記録だけでなく、同時代の日記・書簡・案内書・その他の出版物を相互に参照しながら考察して描いた文化や公的空間としてのロンドン動物園史30年を対象とした本書は、史実、特に、同動物園の運営や経営に関するもの、の発掘だけでなく、動物園をめぐる文化や公的な科学に関して示唆に富む歴史記述を提供した。本書からは、既存の研究を批判的に読みながら、史料を収集し読解して、多様な証言を相互に参照したり結び付けたりしながら、意欲的に自らの見解を組み立てようとした著者の姿が、想像できる。

また、本書が、特定の用語や事象（本書では、帝国）を安易に、あるいは、無頓着な追随者として、歴史研究の説明の要因として用いる姿勢に対して、史料分析に基づいた豊富な証言と注意深い記述を示すことによって反論している点について、評者は共感した。このような著者の姿勢や研究史批判の記述スタイルは、他の読者にとって参考となろう。

他方で、注記した書評も指摘しているように、本書において、帝国と動物園を単純に結びつけたとして批判された諸研究の評価や同時代の動物の位置づけが一面的であるという問題だけでなく、[2] ロンドン動物園の運営者や来場者に関する階級やジェンダーの分析の深化、ロンドンという都市の活動における動物園の位置づけ、といった点について、著者は、今後の研究で答えてゆくのだろうか。また、ロンドン動物園と同時代のイギリスの他の動物園（サリー動物学庭園、ブリストル動物園）との比較史や諸施設の関係史だけでなく、他地域・他国の動物を展示したり鑑賞したりすることは、ロンドン以外の諸都市や諸地域でいかなる展開があったのか、ということも、著者の今後の研究で明らかになることを期待したい。評者が、本評を担当する際に想起したことは、21世紀初めに訪れたスコットランドのニュー・ラナークの工場村における教室の展示であった。19世紀

の理想の工場村として知られるニュー・ラナークに再現された教室には、動物の剥製等は展示されていなかったが、キリン、ゾウ、ライオン等が描かれた絵画が展示されており、19世紀の工業労働者の子弟が、このような動物のイメージを見て教育を受けてきたことが想像できた。このようなイギリスの地方における動物のイメージや学びは、ロンドン動物園のような機関や活動といかに関わってきたのか考察することによって、本書が提起した公的空間における動物や動物園の地位に関する知見は、より豊かになるのではないだろうか。

なお、他の書評でも指摘されたことからもわかるように、近年、本書の研究対象であるロンドン動物園あるいは19世紀イギリスの動物に関する研究が、「増殖」し、数多くの成果が刊行されている。[3] これらの著者たちは、お互いに参照する機会がなかった、あるいは限定されていたと思われるが、今後、「動物史」の転回として、相互に見解を交換しながら発展することになろう。

以上、要約と所見を記したが、誤解や誤読が含まれていた場合はご寛恕を乞う次第である。本書は、著者の研究の重要な業績であると共に、出発点であると思われる。今後、著者による、19世紀あるいはその前後の時代を含めたイギリスにおける動物観、科学、社会文化の結社、都市空間に関する研究について待望しつつ、本評を終えたい。

## 注

1 *Reviews in History*, no. 1653, Reviewer: Andrew J. P. Flack, http://www.history.ac.uk/reviews (2016年10月3日確認); *History*, 100 (2015), Reviewer: Helen Cowie; *Journal of Interdisciplinary History*, 45 (2015), Reviewer: Nigel Rothfels; *Journal of Victorian Culture*, 20 (2015), Reviewer: Harriet Ritvo; *Cultural & Social History*, 12 (2015), Reviewer: John Miller; *Isis*, 106 (2015), Reviewer: J. F. M. Clark; *British Journal for the History of Science*, 49 (2016), Reviewer: Oliver Hochadel; *Journal of British Studies* 55 (2016), Reviewer: Deborah Denenholz Morse.

2 Flack、Rothfels、Ritvo、Miller、Clark、Hochadelの書評を参照。また、著者も原著を参照しており、本書の書評者の一人でもあるハリエット・リトヴォ、三好みゆき訳『階級としての動物 —— ヴィクトリア時代の英国人

と動物たち』国文社、2001年（原著1987年）も比較参照。なお、*Reviews in History*の書評に、著者は応答している。

3　注1の書評は、近年の研究を取り上げている。*British Journal for the History of Science*の書評は、本書の書評者の一人の著作Helen Cowie, *Exhibiting Animals in Nineteenth-century Britain: Empathy, Education, Entertainment* (Palgrave Macmillan, 2014)を同時に論評している。また、Sarah Amato, *Beastly Possessions: Animals in Victorian Consumer Culture* (University of Toronto Press, 2015)も出版された。

――首都大学東京教授